はじめに

「太平記」における大塔宮護良

『太祝御事』の歴史叙述の形質について人物像の観点から考えてみた。前稿について、「後醍醐天皇の皇子大塔宮護良親王について検討する。

護良についての最初の叙述は後醍醐の皇子を紹介する巻一の第三章段「太祝御事」にみられる。そこで護良を「君位をこれ宮にこそと思慮すれば、」「天皇意中の東宮候補」と位置づけるが、東宮には両統位立方針」と「天皇意中の東宮候補」を明示的に行なうが、東宮は「皇位継承の道を断れたので、出家した」と描いてある。

護良は「皇位継承の道を断れたので、出家した」と描いてある。ここで、この記事は鎌倉末期の皇位継承問題やその過程にみられたものであり、単なる護良の紹介記事ではなく、歴史叙述として機能しているところに特徴がある。この文献は鎌倉末期の皇位継承問題やその過程にみられたものである。したがって、全体の二十二字にも満たないものであるが、その叙述は第一部世界の護良像の方向を示し、護良像と歴史叙述との関わり方を示唆する重要な意味をもつのである。

護良は「天皇意中の東宮候補」であったゆえに、天皇の代行や倒幕運動に護良が主体的に関わる道をついた。

①護良は「天皇意中の東宮候補」であったゆえに、天皇の代行や倒幕運動に護良が主体的に関わる道をついた。

②護良は「天皇意中の東宮候補」であったゆえに、天皇の代行や倒幕運動に護良が主体的に関わる道をついた。

③護良は「天皇意中の東宮候補」であったゆえに、天皇の代行や倒幕運動に護良が主体的に関わる道をついた。

以上三点は第一部世界の護良像の役割の基本的な論点を示すものである。では、護良像はこの後どのように開発されるであろうか。本稿では、護良が活躍をはじめる巻二の叙述を対象に検討してみようと思う。

巻二は、「後醍醐が討幕の陰謀を再び進め、それがまた露見し、関

大森北義
名古屋女子大学紀要 第42号（人文・社会編）

- 297 -
『太平記』における大塚宮護良

下される後、幕府平定の席上長崎高資が、やはり後醍醐・護良の罪を論伝せつ、関係者俊基らの処分（死罪）を主張したとして次のように描いている。

『太平記』は、長崎新左衛門尉異見事に至るまで話されるが、この部分は、後に章で詳述される内容である。

今度東流の上洛は、主上を遠国に送り、大塚宮を死罪に

ことにした。此事は、「長崎新左衛門尉異見事」に

まである。後醍醐が京都を脱出し、金紫山にたて BUSINESS

のため、軍事が現れ、大塚宮を追い切るため、軍事行動

を起こすことがある。

したがって、後醍醐・護良の罪を論伝せつ、関係者俊基らの処分（死罪）を主張したとして次のように

描くことがある。

この部分は、後に章で詳述される内容である。
名古屋女子大学紀要 第42号 (人文・社会編)

3

護良描写における歴史的虚構はa・aからbへの展開だけではなく、a・c・dからeへの展開も重要である。これらの描写は、護良の実力を過度に高く評価し、彼の行動は過剰に理想化されている。dからeへの展開は、護良の行動が過剰に理想化されている結果を引き起こしている。護良の真実的な姿を理解するために、これらの描写はもはや意味を持たない。

続く話しでは、護良の性格や行動についてさらに深く考察する。護良の行動が過剰に理想化されていることについては、護良の性格や行動が実際には異なることが示唆される。護良の性格や行動を理解するためには、これらの描写を適切に解釈することが重要である。
『太平記』における大塩宮護良
4

このようにして、aからbの展開だけでなく、cからeの記事にも史実を虚構した仕組みが認められ、巻二の護良の為はその全てが虚構の仕組みの上になされていることがわかる。では、その護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがわかる。護良の中では護良はどのようにに記述されているか、ということがある。
提案を受けた天皇後院卿を「主上は見かざるさせ給へる計」であって、「何の御内消しをも及ばせ給はず」と描き、護良の主導性を強調しているが、花山院師賢が天皇の身代わりとして比叡山に登る場面で、

「太平記」における大塔宮護良

さて、天皇後院卿に指示を出し、味方の作戦を提起したとするところ、護良の役割は、大塔宮より様々に仰ぐ子細あれば、幕府の訴えと、幕府の主導性を明記するのである。

尹大納言賢賀は、主上の大内裏を出でかし夜三条河原まで、供奉せられたりりを、大塔宮より様々に仰ぐ子細あれば、幕府の訴えと、幕府の主導性を明記するのである。

5

さて、天皇後院卿に指示を出し、味方の作戦を提起したとするところ、護良の役割は、大塔宮より様々に仰ぐ子細あれば、幕府の訴えと、幕府の主導性を明記するのである。

尹大納言賢賀は、主上の大内裏を出でかし夜三条河原まで、供奉せられたりりを、大塔宮より様々に仰ぐ子細あれば、幕府の訴えと、幕府の主導性を明記するのである。

さて、天皇後院卿に指示を出し、味方の作戦を提起したとするところ、護良の役割は、大塔宮より様々に仰ぐ子細あれば、幕府の訴えと、幕府の主導性を明記するのである。
<table>
<thead>
<tr>
<th>1</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
</tr>
</tbody>
</table>

和文の読み方を教えるための例文です。
追求の手が周辺の関係者から次第に中心の後醍醐・護良に及んだことで事態が勃発したと、これも虚構にによって掲くのである。それで、その「d」はここに「C」・「D」・「E」を組み合わせ、陰謀裏見の当初から後醍醐・護良に対する幕府の厳しい追求の目があたったというつける一方、周辺から中心の後醍醐・護良に向かって次第に緊張を高めながら弾圧が進行していった状況を作り、そうした緊張の頂点に事変が勃発したという構成をしているのである。

7

調べる。「鎌倉年代記裏書」と「太平記」との間にみられるこの捕縛順序の違いは、おそらく次のように考えるべきである。歴史的には、首謀者、の俊基を捕縛し、つづいて他の関係者を捕らえたのである。そして、『五月・六月』中にはこの捕縛順序をそれぞれ拡大しなかったのである。しかし、『五月・六月』中には次のような順序でそれを描いている。

すなわち、「五月・六月」中には使節が京都に派遣されて関係者が捕らえられたが、それに対して、『五月・六月』中には使節が京都に派遣され、関係者も捕らえられるという構成を示している。そして、『五月・六月』中にはこの構成を示している。

この構想に関連して、いま一つ注目すべき虚構がある。それは、後醍醐・護良の状況に関するものだが、『五月・六月』中にはこの構想を示している。「後醍醐・護良の状況に関するものだが、『五月・六月』中にはこの構想を示している。」

その後、後醍醐・護良の状況に関するものだが、『五月・六月』中にはこの構想を示している。その構想は、先に検討した記事記述の構想に基づき、それに影響されるものなどである。
『太平記』における大塚宮護良

護良の処刑を伝承しつつ関係者を捕縛・処分する攻撃の一に、対立
の捕縛が進行している最中に、「太平記」と「大塚宮護良の処刑」
の二想にあって、天皇の地位を脅かすという攻撃が加わ
られて、後醍醐にとっての危機的状況が確実に広がり深まった状況が
象徴されているのである。

（注）
（1）「太平記における護良親王」（『太平記』通巻三十二号）
（2）護良が天台座主であったのは、嘉暦三年（一二三七）十二月から